Osaka University Knowledge Archive

Title	言語の理解と産出 : 日本語の照応表現を中心に
Author(s)	一尾, 朱美
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40547
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	一尾朱美（いちお あけみ）
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第　13981　号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化専攻
学位論文名	**言語の理解と産出－日本語の照応表現を中心に－**
論文審査委員	（主査） 教授　郡司　隆男 （副査） 教授　玉井　俊紀　　教授　今井　光規　　助教授　三藤　博

論文内容の要旨

本論文は、文の理解や産出には、統語的な構造だけでなく、意味的・認知的なレベルの情報が分離できない状態で関わっており、談話の理解と産出に連続しているということを、実験とテキストデータの分析を通して示したものである。人間の文処理機構の働き方は、統語処理と意味処理が分離せず相互に影響を与えていることが明らかになった。特に、日本語に関して、代名詞照応などに見られる直接照応と、照応関係が前後の言語文脈からだけでは明らかでない間接照応を総合的に捉え、言語の産出と理解に関する実験を行うことによって、人が文に表現される事柄のどの部分に焦点をおいて、それを話題として取り上げ、次の文を産出または理解していくかを解明した。言語に表現される事柄を人がどのように捉え、どのような種類の情報を利用しながら言語を理解・産出していくかという問題について、まず、文レベルにおいて考察し、談話レベルに発展させた。言語の理解と産出は、知覚の効果などと共に、文法的な情報が有効に作用し合って行われる。文法的な情報には、語順や格、文法関係の情報などもあるが、本論文では、特に、意味役割の情報に着目した。意味役割の情報は、言語知識と一般知識の間のインターフェイスとして作用し、統語論、談話モデル、実世界の知識を仲介する役目を果たしている。そして、統語論、意味論、語用論の情報が同時に相互作用的に使用されることを指摘し、統語処理と意味処理が分離できないことを示した。

語順の情報は、単文レベルの理解において、「わかりやすさ」に影響を及ぼすが、複文のレベルになると、ガ格、ヲ格といった格情報が大きな影響力を持つことが示された。格の情報は、意味役割の情報と言い換えられる場合がある。意味役割の情報は、純粋な統語論だけでは説明が難しいような現象について、効果的に作用することが明らかになっている。例えば、不定詞のコントロール現象の説明には、意味役割の階層が有効である。

代名詞照応に関する実験では、被験者に、第1文の理解を通して、第2文を産出させた。第2文の代名詞の照応には、第1文の意味役割に関する情報が有効に作用していることが明らかになった。意味役割の情報が効果的に働くことは、代名詞などの照応表現が省略された間接照応に関しても示された。また、代名詞の代わりに、「指示詞＋実名詞」という照応表現を使用しても、第1文における意味役割情報が影響を及ぼすことがわかった。談話の産出は、文の理解から連続的に捉えることができる。一文の理解には、意味役割の把握といった意味的な処理が不可欠であり、語順情報や格情報の利用といった統語的な処理と意味的な処理とが、並行して、同時に、分離できない状態で、遂行されるのである。

語順の入れ換えに関する実験では、日本語の文レベルの理解の仕組みを明らかにした。実験の結果から、日本語に

は基本語順が存在するということと、節を越える語順の入れ換えが単文の語順の入れ換えとは性質が異なることが明らかになった。節を越える語順の入れ換えを見ることによって、ヲ格の項の方がガ格の項よりも動詞と引き合う力が強いことが示された。また、節を越える語順入れ換えの実験から、中身－空所依存文の理解において、空範疇という抽象的な範疇の心理的実在性に疑義を唱え、これまでに提案されている「直接結合の仮説」・「遅延分析の方略」・「仮結合の方略」などをもとに、空範疇なしの文理解モデルを新たに提案した。このモデルは、下位範疇化情報をもった語彙的主要部が現れた時点で、この要素の下位範疇化情報が照合され、既出の要素がその下位範疇化情報をもった語彙的主要部と結び付けられると考える。これは、空範疇を動詞あるいは述語が持っている情報に還元する考え方である。日本語の中央埋め込み文とガーデンパス文の理解の説明についても「空範疇モデル」では問題があることを指摘した。日本語のガーデンパス効果に関する実験では、語順を入れ換えたり副詞句を付加することによって、ガーデンパス効果の回避が見られたが、格助詞「が」を取り立て助詞「は」に置き換えた文では見られなかった。また、副詞句付加文は、副詞が長くなると処理が困難になる傾向が見られた。文レベルの理解には、語順や格の情報が深く関与している。本論文は、日本語に基本語順が存在することや、格による動詞との結合の強さの違いといった情報が日本語の文理解において大きく影響していることを実証した。

日本語の代名詞照応の産出と理解に関する実験では、代名詞の照応に、意味役割が大きく関わっていることを示した。実験の結果、述語の持つ意味役割に関する情報が有効に作用し、照応関係が捉えられていることが明らかになった。代名詞の照応に関して、表現される状態・事象において焦点化され易い意味役割があることが示された。実験では、4種類の述語を取り上げた。まず、*Goal*（着点）－*Source*（起点）文では、動詞や語順の違いに関わらず、*Goal*の役割に焦点が置かれる傾向が見られた。*Experiencer*（経験者）－*Stimulus*（刺激）文では、*Stimulus*、*Theme*（対象）－*Goal*／*Source*文では、*Theme*の役割が選ばれやすいことが明らかになった。また、*Agent*（動作主）－*Patient*（被動者）文では、能動文では*Agent*、受動文と語順を入れ換えた文では*Patient*に焦点が置かれる傾向が見られ、語順の違いによる影響を受けることが示された。本論文の実験結果と英語に関する先行研究から、代名詞の照応に関して、表現される状態・事象において焦点化され易い意味役割の序列をまとめると、次のようになる。

1．*Goal*＞*Source*　英語・日本語共通（事象叙述文）
2．*Patient*＞*Agent*　英語のみ（事象叙述文）
3．*Stimulus*＞*Experiencer*　日本語のみ（状態あるいは静的事象叙述文）
4．*Theme*＞*Goal*／*Source*　日本語のみ（事象叙述文）

英語でも日本語でも、*Source*よりも、*Goal*に焦点が置かれやすい。この傾向は、コントロール現象でも、また、本論文において補足として行った間接照応に関する調査からも示された。英語では、*Source*よりも*Goal*が好まれ、*Agent*よりも*Patient*が好まれるということから、事象の結果への焦点化が明らかである。事象は、「初期条件」があり、「事象」が起こり、「事象の結果」となるという大きく見ると3段階の構造をしている。「事象の結果」が焦点化される傾向があるということは、事象の構造の中で、最後の段階が最も強く焦点化されるということである。これによって、上から下へ、前から後へという理解のトップダウン処理が説明できる。日本語の場合は、*Agent*－*Patient*文においては、語順の違いによる影響を受ける。能動形でも、受身形でも、また、語順を入れ換えても、最初に現れる名詞が代名詞の指示するものとして好まれているので、知覚のプライマシー効果が現れているといえる。日本語でのみプライマシー効果が有効であるということは、*Agent*－*Patient*文に表示される事象の捉え方が英語とは異なっていると考えられる。また、日本語では、*Experiencer*－*Stimulus*文においては、行為の主体が心理的に向かっていく先である*Stimulus*が焦点化され易くなると考えることができる。また、場所動詞を取り上げ、指示語による照応を調べた実験からも、意味役割の情報が影響を及ぼしていることが明らかとなった。実験では、全体的に、*Theme*役割を担っているヲ格の名詞句に焦点が置かれる傾向があるが、段階的に、*Theme*から*Goal*あるいは*Instrument*（道具）へ焦点が移っていることがわかった。焦点が置かれるところが類似している動詞は、意味内容も類似していることが明らかになった。実験で得られた結果を裏付けるために、電子ブック版朝日新聞の天声人語7年間分を利用して、照応関係を分析した。意味役割として、*Source, Goal, Theme*の3項をとる動詞のうち、「貸す」「渡す」「借りる」「奪う」の4つの動詞を取り上げ、照応関係を分析し、どの意味役割が焦点化されやすいかを調べた。この4つの動詞は、実験において、比較的はっきりと*Goal*志向が示されたものである。既存のテキストデータ

の分析結果は、実験結果を支持するものであった。

論文審査の結果の要旨

本論文は、文の理解や産出には、統語的な構造だけでなく、意味的・認知的なレベルの情報が分離できない状態で関わっており、談話の理解と産出に連続的に関与しているということを、実験とテキストデータの分析を通して明らかにしたものである。

論文は全7章からなり、序論に続く第2章で理論的背景を概説し、第3章は先行研究の概観、第4章は「日本語統語解析とわかりやすさ」という題目の下に語順の入れ換え実験、空範疇の問題、途中で読み誤りが生じやすい、ガーデンパス文などを扱っている。第5章は意味役割と照応について論じ、間接照応、場所動詞にも触れている。第6章はテキストデータを用いた実例による検証であり、第7章で結論をまとめている。

言語の理解と産出は、知覚の効果などとともに、文法的な情報が有効に作用し合って行われる。文法的な情報には、主語・目的語といった文法関係の情報などもあるが、本論文では、特に、語順と格、および、意味役割の情報に注目している。

語順の情報は、単文レベルの理解において、「わかりやすさ」に影響を及ぼすが、複文のレベルになると、ガ格、ヲ格といった格情報が大きな影響力を持つことを示している。

意味役割の情報は、言語知識と一般知識の間のインターフェイスとして作用し、統語論、談話モデル、実世界の知識を仲介する役目を果たしている。そして、統語論、意味論、語用論の情報が同時に相互作用的に使用されることを指摘し、統語処理と意味処理が分離できないことを示している。

以下にそれぞれの実験について詳細を述べる。

語順の入れ換えに関する実験

語順の入れ換えに関する実験では、日本語の文レベルの理解の仕組みを明らかにしている。実験の結果から、まず、日本人話者の間に、「主語－目的語」という基本語順が心理的に存在することが明らかになった。さらに、節を越える語順の入れ換えが単文の語順の入れ換えとは性質が異なることを明らかにし、節を越える語順の入れ換えを見ることによって、ヲ格の項の方がガ格の項よりも動詞と引き合う力が強いことを示した。

また、この語順入れ換えの実験から、中身－空所依存文の理解において、空範疇という抽象的な範疇の心理的実在性に疑義を唱え、これまでに提案されている「直接結合の仮説」・「遅延分析の方略」・「仮結合の方略」などをもとに、空範疇なしの文理解モデルを新たに提案している。これは、空範疇を動詞あるいは述語が持っている情報に帰着させる考え方である。日本語の中央埋め込み文とガーデンパス文の理解の説明についても「空範疇モデル」では問題があることを指摘した。

意味役割の情報

代名詞照応に関する実験では、被験者に、第1文の理解を通して、第2文を産出させた。その結果第2文の代名詞の照応には、第1文の意味役割に関する情報が作用していることが明らかになった。意味役割の情報が効果的に働くことは、代名詞などの照応表現が省略された間接照応に関しても示された。また、代名詞の代わりに、「指示詞＋実名詞」という照応表現を使用しても、第1文における意味役割情報が影響を及ぼすことが明らかになった。

実験では、4種類の述語を取り上げている。まず、*Goal*（着点）－*Source*（起点）文では、動詞や語順の違いに関わらず、*Goal*の役割に焦点が置かれる傾向が見られた。*Experiencer*（経験者）－*Stimulus*（刺激）文では、*Stimulus*、*Theme*（対象）－*Goal*／*Source*文では、*Theme*の役割が選ばれやすいことが明らかになった。また、*Agent*（動作主）－*Patient*（被動者）文では、能動文では*Agent*、受動文と語順を入れ換えた文では*Patient*に焦点が置かれる傾向が見られ、語順の違いによる影響を受けることが示された。

本論文の実験結果と英語に関する先行研究から、代名詞の照応に関して、表現される状態・事象において焦点化さ

れ易い意味役割の序列をまとめると、次のようになる。

1．*Goal* ＞ *Source*　英語・日本語共通（事象叙述文）

2．*Patient* ＞ *Agent*　英語のみ（事象叙述文）

3．*Stimulus* ＞ *Experiencer*　日本語のみ（状態あるいは静的事象叙述文）

4．*Theme* ＞ *Goal*／*Source*　日本語のみ（事象叙述文）

英語でも日本語でも、*Source* よりも、*Goal* に焦点が置かれやすいことが明らかになった。この傾向は、コントロール現象でも、また、本論文において補足として行った間接照応に関する調査からも示された。英語では、*Agent* よりも *Patient* が好まれるということから、事象の結果への焦点化が見られる。日本語の場合は、*Agent*－*Patient* 文においては、語順の違いによる影響を受け、受身形やかきまぜによって語順を入れ換えると、最初に現れる名詞が代名詞の指示するものとして好まれることが明らかになった。知覚のプライマシー効果が現れているといえる。

日本語でのみプライマシー効果が有効であるということは、*Agent*－*Patient* 文に表示される事象の捉え方が英語とは異なっていると考えられる。また、日本語では、*Experiencer*－*Stimulus* 文においては、行為の主体が心理的に向かっていく先である *Stimulus* が焦点化され易くなっていると考えることができる。

総評

本論文は、記述においては、実験法の説明や個人差の評価などに若干の不備が見られたり、実験計画やそのデータ処理にも不十分なところが見られたりもする。また、照応現象におけるいわゆるゼロ代名詞やより広く談話の文脈を考慮に入れるべきであることなど、望むべき点が多くあるのは確かである。「空範疇」の存在に関する議論も弱いところがある。

しかし、理論的なモデルを実験によって検証することを試み、その結果、動詞との結び付きの強さという点から、内項・外項という、理論家によって立てられた区別の心理的実在性が浮きぼりにされたこと、文境界を越える意味役割の効果、特に *Goal* の役割を明らかにしたこと、などは特筆すべきである。さらに、意味役割の序列に関して、英語と日本語との違いを浮き彫りにしている。また、非常に注意深く作られた作例による実験に留まらず、生のテキストデータによる検証も行ない、実験を補強していることも本論文の特長であると言えよう。論文全体の構成も、理論的背景の説明や先行研究の概観などにも十分のページ数をあて、読みやすくわかりやすいものとなっている。

以上の諸点から、本論文はこの分野の第一線の研究の水準に達している優れたものであり、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。